

日本通運 グループ

システム導入でETC2.0の導入

日本通運グループは、2015年の事業用車両の運行管理・動態管理を強化し、安全管理・ETC2.0対応、ドライバーの労務管理を目的に「オペレーション支援システム」を開発・運用している。

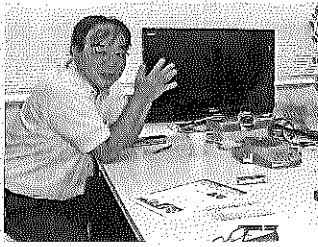
オペレーション支援システムの中核となる車載器には、データ・テックの「セインテック」(SR)を採用。現在、国内の日本通運各店、関係会社、海外では、なんと1万台超が導入されている。日通では、既に同社製SRからの各種データを収集した「オペレーション支援システム」による、車両の動態情報(現在位置や運行管理・危険発動・リアルタイム作業メータ)を、積込みの有無の把握などに積極的に活用している。

日本通運の中野専任部長は、データ・テックのSRは、いわゆる運行記録計としての機能に加え、安全エコーサイン運転の実現に向けて、

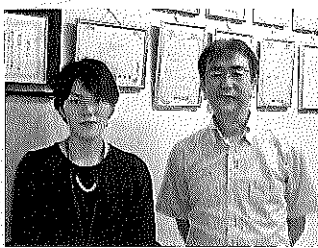
必要は運転補助(急停止、急発進、速度超過、右折時や旋回時の急ハンドルを感知)、安全管理・ETC2.0対応、ドライバーの労務管理を目的に「オペレーション支援システム」を開発・運用している。

SRは、データ・テックの「セインテック」(SR)を採用。現在、国内の日本通運各店、関係会社、海外では、なんと1万台超が導入されている。日通では、既に同社製SRからの各種データを収集した「オペレーション支援システム」による、車両の動態情報(現在位置や運行管理・危険発動・リアルタイム作業メータ)を、積込みの有無の把握などに積極的に活用している。

日本通運の中野専任部長は、データ・テックのSRは、いわゆる運行記録計としての機能に加え、安全エコーサイン運転の実現に向けて、



日本通運の中野専任部長

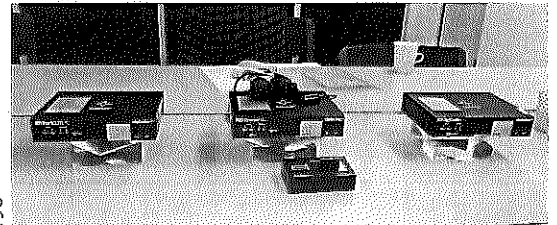


データ・テックの菅原専務(右)と広報室の杉山千広さん

車両を動態管理 データ・

ETC 2.0の導入も進む

センサ、GPSなどで車両の挙動をつぎまに記録する車載器。特に、ハンドル操作の評価にジャイロセンサを使用しているのが最大の特徴だ。ほかのメーカーと違う特徴を、理解していただきたまあり難い。このシステムは、すでにいち早く車載器と業務用ETC2.0の対応を実現している。日本通運への協力により進められた。特に、現場での協力に感謝



日通で稼働しているデータ・テック製の車載器

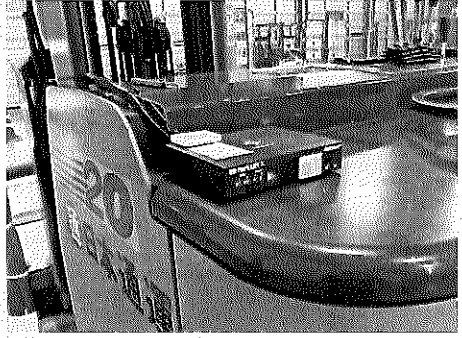
今後を見据えて、いち早く車載器との連携に対応した。感謝している。既に1400台ほど導入している(中野専任部長)。

運輸業界でETC2.0が先行して導入されている。日通では、運転時の5原則(①出すな②トド絶対するな③急旋回④荷物の前で一旦停止⑤進行方向への100%の指差し)を呼び込み、ドライバーが自分自身の運転状況を把握する方法が今までなかった。管理者も作業現場を一旦監視することができない。そうした課題を、日通グループでは、現在、業務仕様のETC2.0機種について、必要度の高い車両から順次装着し、SR車載器や向社システムとの連携を開始している。

また、日通では昨年フォークリフトの安全性向上のため、データ・テックの「SR Forklift」(セイフティレコーダ) フォークリフト・エヌ(エヌ)を同社で初めて熊本支店に試行的に導入した。

伊豆研修センターに全国のフォークリフト指導員を集め、その実用性について検証を行った。その結果、フォークリフトの挙動が深く分かる「オペレータの運転特性が細かく見える」とい、高い評価を踏まえ、導入を決定したという。

日通では、運転時の5原則(①出すな②トド絶対するな③急旋回④荷物の前で一旦停止⑤進行方向への100%の指差し)を呼び込み、ドライバーが自分自身の運転状況を把握する方法が今までなかった。管理者も作業現場を一旦監視することができない。そうした課題を、日通グループでは、現在、業務仕様のETC2.0機種について、必要度の高い車両から順次装着し、SR車載器や向社システムとの連携を開始している。



リーチ式フォークリフトに取り付けたSRフォークリフト

「SR独自の安全運転診断機能を追加し、今後、料金や運行経路情報だけでなく、ETC2.0から得られる安全運転支援情報も効果的支援情報などを一元的に利用することができれば、さらなる安全性の向上と業務の効率化が期待できる。随時、対応機種を増やしていく。国の施策もあり、今後への取り組みが

「SRでとれる情報は多く、今のところETC2.0側からは有償での情報提供サービスが一部開始されているだけであり、今後、車載器同様に新たな情報が提供されていくことを期待している。データ・テックには、